

## シンポジウム「生命の資源化の現在」

## なぜ私は代理出産に反対するか

大野 和基

私の仕事は学者とは違って、生の声を聞いてそれを執筆することです。最初はあまり先入観を持たずに真っ白の状態の人と会うことが重要です。つまり、私の場合は、女性でもないし不妊でもないし、自分の家は普通に子どもが生まれていますから、全く不妊にも関係ないので、どの対象者も等距離で対することができます。だから、代理母に取材するときも、依頼カップルに取材するときも、あるいはその家族、あるいはその医者、あっせん業者に、弁護士に取材するときも、すべて等距離を保ちながら取材できます。これは私の利点であると思っています。

最初のきっかけとなったのは、1978年の「ベビー M 事件」です。当時私はニュージャージーの裁判所からちょうど車で5分ぐらいのところに住んでいましたので、たまたま、毎日そこに通いつめることができました。ジャーナリストの世界に入って、まだ2、3年しか経っていませんでした。当時は32歳ですから、まだ青二才で、右も左も分からないような状態で毎日通って取材しました。それから、去年、集英社から代理出産の本を出したのですが、約20年のあいだに、折に触れて、事件が起きるたびに、取材し、記事を発表してきました。最後の方では向井亜紀さんの代理母にも直接取材しました。

そこで最終的に一番感じたことというのは、子どもの視点の重要性です。これは今まで報道されていなかったことなので、「絶対に報道しないといけ

ない」と感じました。子どもの視点というのは、非常に難しい。つまり、子どもにインタビューすると言っても、生まれたての子どもにインタビューしても意味がありません。どうしてインタビューしたらいいかわからないと思っているときに、1990年の9月にNHKスペシャルで「代理出産ビジネスが日本に上陸する」という番組を資料として観ました。そのときに取材されたカップルが、マーケル家で、私の本の中に出てくる家族です。

今から3年前の2007年に、ふと、マーケル家の子どもは、当時は赤ちゃんですが、今取材すれば高校生あるいは大学生だから自分の意見が言えるのではないかと思ひ、その子どもに取材する機会を得ました。ところが問題は、子どもにインタビューしているときに、お母さんが横にいます。お母さんが横にいるから、子どもがなかなか本音を言えません。「私は代理出産で生まれてきたくなかった」とは言えないのです。母親は子どもの顔をじっと見て、子どもが緊張しながら、何か言おうとすると、お母さんが横から子どもの意見を代弁して言うてしまう。お母さんは決して幸せなように見えませんでした。

なぜかという、依頼するカップルの幸福追求権は今まで言われている通りで、不妊カップルだから、当然技術もあるし、なぜ赤ちゃんを持つてはいけないのか、と必ず主張します。でも代理母も何人もインタビューしてきましたが、誰をインタビューしても、全員例外なく貧しいのです。しかも、代理母たちは、そのボーイフレンドや夫と必ず大げんかになっています。なぜ、自分の妻やガールフレンドが、他人のために妊娠しないといけないのか、というのが男性側の言い分です。あるいは、代理母の母親と代理母が縁を切られた例もあります。自分の娘が他人のためになぜ妊娠しないといけないのか、というのが代理母の母親の言い分です。だから、代理母側の家族も滅茶苦茶になっているということです。

実際にアメリカに代理出産を依頼しに行った日本人カップルについては、取材しましたが、本の中には出てきません。最初は書いたのですが、量的にかなりオーバーするということでその章を全部カットしました。取材したのは、サンフランシスコに行つて頼んだ、鹿児島夫婦とその代理母です。彼

女は、自分が代理母をすることを夫に1カ月間言えませんでした。1カ月間ずっと悩んだのです。子どもが3人いたのですが、子どもにも言えませんでした。最後には告白したのですが、夫もしばらく考えこんでしまいます。まさか自分の妻が他人のために妊娠するとは、と夫も叫びました。夫の収入が少ないということが原因です。向井亜紀さんの代理母であるシンディーの場合も同じで、やはり夫が自己破産していました。夫は、自分にも原因があるということは分かっているのですが、なかなか「一生懸命稼ぐからやめてくれ」とは言えません。このお金の困っている現状を子どもにも説明できません。子どもは、9歳、10歳でしたから、聞いても答えられません。「ママは人のために何かいいことをするのね」というくらいしか分からないのです。

実際にマーケル家が頼んだ代理母の子どもは、代理母が産んだ赤ちゃんを手渡すときに、病院で暴れています。つまり、自分の兄弟になるはずの子どもが他人の家族に行くわけですから、「なぜか」と子どもは思います。いくら親が説明しても分かりません。その家族は気持ちが悪くなります。代理母は、旦那あるいはボーイフレンドとも大げんかし、さらに子どもは、永久に傷がついています。でも、お金をもらっているから我慢するという状態です。依頼した方は、「お金渡しているから文句を言うな」という気持ちです。「契約しているから文句を言うな」ということです。

それで、代理母側の家族も精神的に悪くなります。どの代理母に取材しても、大体悪くなります。先ほど、「中毒化」、つまりいったんやってしまうと、「これだけお金が入ってくるのか」と病みつきになる話が出ました。一回やって、今だと1万ドルから2万ドルです。シンディーは、家を買うのに5万ドルのローンがありました。ですから、2～3回やれば家のローンも払ってしまいます。ネバダ州の田舎ですから経済活動もほとんどありません。ネバダ州では、日本人からの依頼をどんどん受けてやってしまうという、一種の悪循環になってしまうのです。自分をできるだけマヒさせようとする。「人のために子どもを産んであげるといのはいいことだ」と自己暗示にかけてやり続けます。

シンディーの夫も、インタビューするときに横にいたのですが、ときど

き私は彼の顔を見ました。自己破産していることを私は口に出しませんでしたが、夫はニコリともしないで、ずっと緊張したままでした。呼吸しているかどうか分からないぐらい何も言いませんでした。シンディーへのインタビューが終わってから、「代理出産をどう思いますか」と聞いたら、一言「いいことだと思います」と言っただけです。それしか言いませんでした。だから、代理母側の家族もお金もらっているから我慢するしかないのです。それから、代理母側の子どももやはり混乱しているのです。生まれてきた子どもが兄弟にならずにどこかに行ってしまうわけですから、何が起きているのか理解できません。

根津八紘先生の場合、今も何回か指摘がありましたけれども、現在、姉妹の代理出産はやっていません。私が最初にインタビューしたときはやっていましたが、この本のためにもう一度インタビューしたときは、もう、「実母」しかやっていませんと言いました。それはなぜかという、お姉さんが頼まれると、お姉さんの子どもにウソをつかないといけない。ウソをついても、ウソをつききれないのです。「今、お母さんは妊娠してお腹が膨れているけれども、これはあなたの兄弟にならない」と、いくら説明しても子どもは分からないのです。もちろん秘密でやっていますから、学校の友だちにも全部ウソつかないといけない。それで、夫も小さなことですが、つわりが出てくると、「なぜ、自分が我慢しないといけないのか」ということになります。そういう小さな問題が日々起きて、そこまでは根津先生は責任が取れないということで、姉妹間の代理出産はやめてしまったと言いました。日本でもアメリカと同じように代理母側の家族も滅茶苦茶になっています。だから、表面的に見ると、根津先生は代理母、代理出産に賛成のように見えますが、実は限りなく反対に近いのです。お金のやり取りにも反対です。実際に行っているのは実母だけです。

ところが、皆さんご存じのように、最近NHKでよく話題になっている、『これからの"正義"の話しよう』の著者であるマイケル・サンデルさんに4月にボストンで取材しました。取材したら、彼は、お金のやり取りがあるものには反対すると言いました。それはなぜかという、**「生殖能力を**

売ること」「子どもに対する母親の権利の売買」、それはお金で売買するものではないとサンデル氏は言うております。サンデル氏はお金のやり取りがなければ代理出産はいいのではないかと私に言ったのです。私はもちろん反対しました。そこで反対して、次の授業で必ずテーマとして、大学の講義で出すように言うてきました。

例えば、根津先生が使っている「実母」についてですが、60歳でも70歳でも妊娠しようと思つたらできます。ホルモンをずっと打ち続けて、閉経した子宮をちゃんと着床できるようなフワフワの状態に持つていくことができます。親も、根津先生が言うには、「死ぬ覚悟」でやります。いくら医者であっても、子宮が最後までつか、妊娠の最後まで完結できるかどうか分かりませんから、途中で死んでもいいのかと実母に聞きます。本当は自分は死んでもいいとは言にくいけれども、「娘のためなら死んでもいい」と言う母親だけに限ってやります。でも、それは私から見れば完全に一線を越えているのです。英語に「クロス・ザ・ライン」という言葉がありますが、それは完全に一線を越えています。

だから、お金をやり取りする場合ももちろん反対だし、お金のやり取りがなくても反対です。ただ、全体的に見たときに、一見すべてうまくいっているように見えますが、子どもから見ると母親が2人いる状態、つまり産んだ母と育ての母がいる状態で、子どもはかなり混乱しています。

これは、前提として、親は子どもに出自を教えているということです。6歳ぐらいから、必ず、「あなたはこうやって生まれた」と教えているということです。いくら説明されても、子どもはかなり混乱しています。学校でもいじめられています。「君の母親は、いったいどちらが本当の母親なのか」と毎日のようにクラスメートに言われています。殴り合いのけんかになったこともあります。

マーケル家の少年もそのようにして、ずっと思春期を育て、私がインタビューしたときも、ものすごく答えるのが大変でした。つまり、母親が横にいますから、なかなか本音が言えないのです。本当は、母親がいない状態でインタビューしたかったのですが、その条件を出すことで取材拒否にあ

い、この本がとうとうできなくなったら大変であるとか、いろいろなことを考えました。取りあえず、一生懸命聞いて、顔の表情やら、いわゆる行間を読みながら、きくと「ああ、これはもう苦しい」と本人は思っていることが分かります。本音は、こうやって生まれたくなかったと言いたかったと思います。でも言えなかったのでしょう。隣に座っている母親が、イエローカード出したりしますから、本音は言える状態ではありません。でも、もし、本当に純粋な私たちでインタビューしたら、「こうやって生まれたくなかった」と、はっきり言ったと思います。

それは、親が、幸福の追求権があるならば、子どもにも幸福の追求権があるということです。でも、生まれたときから、そういう状態で生まれている限りは、かなり普通とは違います。出発点が違います。だから、子どもの苦労を考えると代理出産を賛成することは、私にはできません。お金のやり取りがあろうとなかろうと、できません。

実際に、もし代理出産を容認したらどうなるのでしょうか。インドで、生殖ツーリズムが流行って、かなりいろいろやっていますが、真ん中に仲介業者が入っています。その業者にかなりぼったくられています。実際にだまされている人もいます。つまり、妊娠していないのに、インターネットで、「あなたの胎児はこのぐらいの大きになりました」と、どんどん超音波の写真を送ってきますが、全部ウソです。でも、インターネットですから、「ああ、本当かな。自分の子どもはどんどん大きくなっているな」と依頼した夫婦は思うのです。お金を途中でどんどん払っていきます。でも、最後にもうすぐ生まれるというときに、連絡がピタッと止まってしまうのです。お金だけぼったくられたままです。

これは、2年か3年前に、NHKで放送された、オランダのテレビ局が作った番組でやっていました。この中でご覧になったことある方もいると思います。フジテレビがやったのは、インドで一回代理出産をやると3年分か4年分のお金が入ってくるから、家もすぐ建つという番組です。お金のために自分の子宮を貸すビジネスとして割り切っています。お金のために自分の生殖能力を売っているのです。

マイケル・サンデル氏が言っているように、お金で自分の生殖能力を売買することは反対です。それを実際にグローバル化の一環として、日本でもし法律を作るとすれば、海外で代理出産をやるのも禁止という法律を作らないと意味がありません。これは、この前学術会議で私が報告したときに聞いたのですが、そういう法律も可能であると言われました。海外で代理母を依頼しても、日本で罰することができるという法律です。だから、代理母を完全に禁止する状態にできます。

依頼する側ですが、代理母側の家族を滅茶苦茶にして、自分が最後に引き取る子どもの人生も、思春期を葛藤させながら苦労させてまで、子どもがほしいと思うのでしょうか。ただ単に、そこにお金のやり取りがあるからという理由で、そこまで許せるのでしょうか。やはり、どの角度から見ても、賛成の余地がないと思います。依頼する側、つまりマーケル家の奥さんであるリンダが実際に赤ちゃんをもらったときの気持ちを聞いたら、全く嬉しくなかったそうです。

それはなぜかという、あまりにも周りの人の葛藤を知っているからです。自分が頼んだ代理母が死にかかりました。2人の代理母に頼みましたが、2人とも死にかかっているのです。実際に妊娠の途中で死んだ代理母のお母さんにインタビューしました。マーケル家の場合にはたまたま死ななかつただけです。1人目は人工授精型、2人目・3人目の双子は体外受精型で生まれたけれども、たまたま表面的にはうまくいきました。1人とてもし気持ちが揺らげば、全体が崩れていたでしょう。

代理母に「自分の子どもを妊娠しているときと他人の子どもを妊娠しているときはどう違うか」と聞きました。やはり、他人の子どもを妊娠しているときは気を使うそうです。「他人の子どもは商品だから」とは言いませんが、マイケル・サンデル氏がこの本の中に書いているのは、「金をもらって妊娠することについて、彼女（代理母）はこう話した。『自分の子どもを妊娠したときよりも、ずっと気を使っています』と」。

つまり、自分の子どもを妊娠しているときは、障害児が生まれても当然育てます。かわいいから。初めはショックを受けても必ず育てます。でも、例

えば身内としても、お姉さんに代わりに産んでくださいと頼まれて、もし障害児が生まれた場合、たぶん、お姉さんと妹の確執が生じます。「なぜこんな子産んだのよ」と言われます。どんな子が生まれてきても平等に引き取らないといけないという法律を作っても、気持ちとしては、確執が必ず生じます。

代理母が、もし障害児を産んだときにどうするか。やはり、子どもが犠牲になるのです。それが姉妹でなくて他人の場合は、私の本の中にも書きましたが、引き取り拒否することもあります。代理母が産んだときに、既にエイズだったという子どももいました。これも、引き取り拒否でした。子どもは行くところがないのです。頼んだ方も引き取らない。産んだ方も引き取らない状態です。だから、結局施設に行くしかありません。一番犠牲になるのは、やはり子どもです。

いろいろなこと考えると、代理母の家族の犠牲とかいろいろなことを考えても、やはり、生まれてくる子どもは自分の声を出せない。つまり、初めに同意書で同意しますが、新しく生まれてくる子どもは同意していません。依頼する側と依頼される側は同意していますが、新しく生まれてくる子どもは同意しようがない。普通の手術の場合のインフォームド・コンセントと、この場合のインフォームド・コンセントは全く違います。

普通の手術の場合だと、「こういうリスクがあります」「はい、分かりました。A、B、Cがあつて、Aを取ります」ということで済みます。でも、代理出産の場合は、新しい生命が生まれてきますから、その新しい生命は同意できません。その子が16歳ぐらいになって、バックデートして「同意しますか」と聞かれて、反対と言っても戻ることはできません。だから、法律上どう考えても、普通の同意ではあり得ないのです。新しい生命が生まれてくる。妊娠のリスクを負わせる。お金を渡しているから我慢させる。いろいろな角度から考えても、私は代理出産に賛成することはできません。

この20年間、いろいろ考えました。最初のころは、「この場合はいいのか」とか、「この場合は悪いのか」とか考えました。前に学術会議で発表したときに、日本でもあるということを知ったのが、健康な体なのに自分が妊



娠するのが嫌だから、お金を渡して実際に他人の女性を妊娠させて産んでい  
る夫婦がいるということです。それは、つい最近のことです。アメリカでは  
女優が、自分は妊娠できるのに、お金を払って他人の女性に代理母をやらせ  
て子どもを作っていることがあります。

もし、合法化したらどうなるかという、いろいろな方法でごまかせます。  
ですから、代理出産は全面禁止にするしかないと思っています。

(おおの・かずもと ジャーナリスト)